

# 大人・若者・大学について怒濤の1960年代からの断章 ——京大タテカン問題に端を発して(2)

吉田英生 (S53/1978卒) [sakura@hideoyoshida.com](mailto:sakura@hideoyoshida.com)



## 1. はじめに

今年5月13日に撤去された京大のタテカン。その後いろいろありましたが、現在は上の写真のような状況です（百万遍交差点東、10月23日）。この間、マスコミや個人のコメントでも多数取り上げられました（8月18日夕刻にはHNKも『それでも彼らが戦うワケは～京大・タテカン攻防の若者たち～』の30分番組を放映）。筆者が目にしたのは、そのごく一部に過ぎませんが、後藤正治氏の日経記事『タテカン考・若者考』（9月18日）は、怒濤の1960年代への言及もあり、共感するところ大でした。そこで、この記事からまったくの個人的な思考連鎖ではありますが、1960年代に関連する三つの断章を拾い上げてみました。

## 2. 大人について

後藤正治氏は、まずタテカン問題につき、次のようにコメントします：

少々、半畳を入れるとすれば、別段、タテカンがあったとてだれが迷惑するでなし、ケイカンを損ねるといふ杓子定規な適用はいかがなものかと私は思う。

加えていえば、雑多な、さまざまな表現行為があつてこそ大学だと思ふ。ましてや京大は、異才や異能、あるいは一時期、アングラ劇やロックコンサートの場と化した「西部講堂」がそうであつたように、“異物”や“異界”への寛容自由度を売りにしてきた学校ではなかつたか。

百万遍界限、かつて数軒並んでいた古書店も一軒のみになっていた。老舗の喫茶店で健在なのは進々堂ぐらいで、タテカンの不在は、大学街のやせ細りの象徴のごとくに映つたのである。

そしてこのあと、今年1968年におきたフランス5月革命から半世紀ということで、パリ・ソルボンヌの大学街を中心に、街角の壁に書きなぐられた、タテカンならぬ「落書き」（『壁は語る—学生はこう考える』広田昌義訳、竹内書店、1969）に話を展開します。（なお、筆者も拙稿—京機短信315号—でパリの線路わきの「落書き」に話を展開しましたが、後藤氏の深みある展開との差を痛感しました。）そ

して、氏は以下のように記事を結んでいます。

いつの時代も、若者たちの表現活動はアナーキーな色彩を含んでいて、大人たちは眉をしかめるものだ。いずれにせよ、若者が次の時代を担っていく。大人たちにできることはあまりないのと思う。せいぜい、邪魔をせずにほっておく。それがベターな選択ではあるまいか——。そんなことをつらつら思いながら大学周辺を歩いていた。

『壁は語る』に、こんな一文も見える。《禁止することを禁止する》(\*1)

(\*1) 原著 les murs ont la parole - mai68, Julien Besançon では《Interdit d'interdire.》

この文章からの延長線上で個人的にギクッとしました。研究指導の面でも、自分が同様なことをしていないか—学生がもともと有している大胆で伸びやかな発想の芽を、こりかたまった先入観に基づく指導で摘んでいないだろうか。

### 3. 若者について

私事で恐縮ですが、最近、山本義隆氏の『熱学思想の史的展開—熱とエントロピー』（ちくま学芸文庫、全3巻、2008–9）の「まえがき」と第18–20章を英訳しました（<http://www.aihtc.org/fourier.html>）。同書は熱学史に関して世界的にも稀有の書であるとの思いから、まず、そのなかでも最も興味深い James Watt や Sadi Carnot に関する章から世界に紹介することに着手した次第です。その山本氏の『私の1960年代』（金曜日、2015）は、東大全共闘代表として活動した当時を振り返ったもので、強靱な頭で考え抜き行動した氏の20代の記録として読み応えがありますのでご紹介させていただきます。もちろん、東大紛争自体には入試が中止になった世代の方々を筆頭として、いろんな思いはあることと思います。

一方、筆者の学生時代は英国の哲学者 Bertrand Russell(1872–1970)が亡くなって間もないころでした。Russell の簡潔明瞭で美しい文章は受験英語では英文解釈の問題としてもよく出題されましたし、核兵器に関するパグウォッシュ会議やベトナム戦争に関する Russell 法廷など、大きな影響を受けたのは筆者に限らないと思います。その Russell の膨大な著作の中で、たまたま出会った以下の言葉（アメリカの13歳の生徒からの手紙に対する返事）は、教育の原点にあるものとして、筆者が座右の銘としているものです。

March 26, 1962

Dear Mark Orfinger,

Thank you for your admirable letter which I read with great interest. I am sorry not to have answered it earlier.

I believe that the main object of education should be to encourage the young to question and to doubt those things which have been taken for granted. What is important is independence of mind. What is bad in education is the unwillingness to permit students to challenge those views which are accepted and those people who are in power. It is necessary for new ideas to

emerge, that young people have every encouragement to fundamentally disagree with the stupidities of their day. Most people who are respectable, and most ideas which are considered to be fundamental are barriers to human achievement.

I feel that it is not as important to learn large numbers of things as it is to feel passionately that one has the right to disagree and the obligation to develop new ideas. (omit)

With good wishes,

Yours sincerely

Bertrand Russell

*“Dear Bertrand Russell, a selection of his correspondence with the general public 1950–1968,” pp. 106-107, George Allen and Unwin, 1969.*

#### 4. 大学について

安倍内閣主導で「働き方改革」が2016年9月から進行しています。筆者はその子細をフォローしているわけでもなく、また熟慮してきたわけでもありませんが、時間、賃金、保育施設などの改革の重要性もさることながら、もっと仕事の背景となる日常的なところで“こころ”の改革の重要性が必ずしも十分には認識されていないように思えます。

筆者は大学にしか身をおいたことがなく、狭い世界しか知りません。そのような筆者でさえ、「個人レベルのこと」との批判を覚悟の上で話題にさせていただければ、ほぼ同年の教員どうしが師弟関係でもないのに“先生”と呼び合う世界、また外部の組織に対する遠慮を伴う場合はともかく同じ組織内であるにもかかわらず事務の方々は毎回のメールを「お世話になっております」で始めるという教員—事務員間の非対称な世界（お世話になっているのは間違いなく教員の方ですが）は、世間的に見てもどうなのかと思っています。企業ではお互いに「さん」で呼ぶようにしているところも多い昨今です。そして、学内に限らず、“先生”どうしが“先生”と呼び合うものですから、産官学が集う学会等でも産官の方たちもやむなく？“先生”と呼ぶことが多いように思います（\*2、\*3）。

（\*2）アンケート結果：学会の場での「先生」と「さん」の呼び分けについて  
（吉田英生 2009年12月） [https://www.jsme.or.jp/ted/enquete1\\_by\\_chair.html](https://www.jsme.or.jp/ted/enquete1_by_chair.html)

（\*3）同窓会である京機会でも、以前はそのような傾向が強かったと思いますが、ここ何年かの運動が功を奏し師弟関係以外ではかなり緩和されたと思います。

そのようなことを考えるたびに思い出すのは、わが国でのトランジスタ研究のパイオニアのひとり菊池誠氏（1925–2012）が1960～61年のMIT留学体験に触れた以下の文章です。

その小さい驚きの中で、いちばん胸に答えたのは、ある日の午前中のコーヒー休みのでき事であった。

わたしの研究室の下、地下に自動販売機が並んでいて、午前と午後の休みに、わたしはよく

そこでコーヒーや、アイスグリームを口にした。

第一に、このアメリカ的な機械に、わたしは別にそれほど違和感を覚えなかったこと、第二にそこでよく立ち話ができただこと、それが理由であった。なくなった声楽家の藤原義江が、アメリカのコーヒーの自動販売機は、いつも決まったところでピタリと止まるから味気ない、とよく話していたが、わたしには生来そういう反撥を持つところが無いので、好んでそこに行った。

今でもアメリカの出張で M.I.T. へよると、この場所に行ってアイスクリームをとり出し、食べながら、昔のことを思い出す。懸命な生き方をしていたころのことが頭に浮かんで、アイスクリームがほろ苦くなることもある。

さて、その日、いつものように、そこに行ったら、電気工学科のボスのエライアスと、床そうじのおじさんのジミーとが、紙コップのコーヒーをすすりながら、税金の話をしているのである。

どう見ても、アメリカの『平民社会』の姿がそこにある。

仕事という契約の世界では厳然として立場の上下がありながら、一私人にもどる時、人びとは、本質的平等をとりもどす。封建性のきらいなわたしは、この二人の立ち姿を、しばらくうっとりながめていた。

『エレクトロニクスからの発想』（講談社ブルーバックス 1982）

「仕事という契約の世界では厳然として立場の上下」という表現もあるので、前述の「非対称性」を完全に排除する文脈にはなっていませんが、今から60年近く前という時間差を考慮しつつこの情景を想像すると、何ともいいなと思います。

最後に、これまで関連付けてきた1960年代から例外的に現代に戻らせていただきます。働き方改革の日常的インフラ面として付け加えますと、最近の企業で積極的に試行されている空間作りにも多いに学ぶところがあると思います。そのような空間作りの極致ともいえる、かの Steve Jobs らが設立した Pixar 社の社屋に関する文章を引用します（下線は筆者）：

Built on the site of a former cannery, Pixar's fifteen-acre campus, just over the Bay Bridge from San Francisco, was designed, inside and out, by Steve Jobs. (Its name, in fact, is The Steve Jobs Building.) It has well-thought-out patterns of entry and egress that encourage people to mingle, meet, and communicate. Outside, there is a soccer field, a volleyball court, a swimming pool, and a six-hundred-seat amphitheater. Sometimes visitors misunderstand the place, thinking it's fancy for fancy's sake. What they miss is that the unifying idea for this building isn't luxury but community. Steve wanted the building to support our work by enhancing our ability to collaborate.

Edwin Catmull, "Creativity, Inc.: Overcoming the Unseen Forces That Stand in the Way of True Inspiration," Random House, 2014. (邦訳 ピクサー流 創造するちから、ダイヤモンド社) もちろん、これは同社の莫大な財力あつての話ですが、そのような財力とは無縁の大学でも、みんなの知恵と気持ちをあわせ、ちょっとした工夫で快い空間を作り出せないかと思います。どちらかというとお互いに個人プレー優先で個別の部屋にこもりがちな大学ですが、学内の多くの人たちともっと自然なコミュニケーションが生まれるような仕事空間・雰囲気を生み出せたらと願っています。